



ISSN: 2189-9126

# 国際開発研究フォーラム

## FORUM OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT STUDIES

### 研究論文

#### ARTICLE

## アフリカ都市零細産業における学びの空間構成

—ウガンダ首都カンパラの零細金属加工業を事例に—

山崎 裕次郎

Constructing Learning Spaces in African Urban Micro-Industries.

A Case Study of Micro Metal Fabrication Industry in Kampala, Uganda

*Yujiro YAMAZAKI*

# 52-8

名古屋大学大学院国際開発研究科  
GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT  
NAGOYA UNIVERSITY

# アフリカ都市零細産業における学びの空間構成

—ウガンダ首都カンパラの零細金属加工業を事例に—

山崎 裕次郎\*

Constructing Learning Spaces in African Urban Micro-Industries.

A Case Study of Micro Metal Fabrication Industry in Kampala, Uganda

*Yujiro YAMAZAKI*

## Abstract

This study aims to clarify how the learning contexts are constructed in Uganda's urban micro metalwork industries. Informal micro-enterprises are widespread in Africa, where workers learn through work practices rather than through skill formation by schooling. This study focuses on the contexts of learning in situated learning and discusses the construction of learning contexts based on the analytical framework of "arena" and "setting" proposed by Lave (1988). Ethnographic methods were employed to unravel the practices of learning and the learners' perceptions. From the results, apprentices acquire knowledge and skills by accumulating their experiences ("setting") in the workshop as a given space ("arena"). On the other hand, in the case of the skilled workers, they did not take the "arena" as a given but speculatively moved to a new "arena" based on the "settings" and constructed contexts for learning. The learning contexts are not only existed in the community of practice as given but performatively created by speculative participation according to individuals' experiences.

キーワード：インフォーマル・セクター，状況的学習論，徒弟制，学びの文脈，アフリカ

## 1. はじめに

本研究は、ウガンダ都市零細金属加工業における学びの空間がいかに関構成されているのかを明らかにすることを目的とする。アフリカ都市には、インフォーマル・セクター<sup>1</sup>と呼ばれる零細産業に従事する人々が多く存在する。零細産業を生業としている労働者は、今後も増加すると見込まれており、無視できる存在ではない (ILO 2009)。本研究は、零細企業に注目する中でも、労働者の技能形成の側面に着目していく。

零細産業に従事する人々は、徒弟に入り仕事をしながら学校外での技能形成をおこなっていく。徒弟制や職場内訓練は、体系的に制度化された学びの形式ではない為、その実態はとらえづらい (de Beer et al. 2016)。その実態を照らし、効果的な人材育成を促すために、公的機関への統合や徒弟制の制度化を提唱し、学びの空間を設計していく議論がされている (Adams et al. 2013)。本

\* 名古屋大学大学院国際開発研究科 博士後期課程

研究は、そのような制度化による学びの空間設計から一度距離を置き、零細企業の人々が日々営んでいる、仕事と学びが表裏一体である空間の実態を理解していくことを目指す。

本研究では、学習を状況と結びつけた状況的学習論から、学びを考察していく。その中でも、徒弟制から着想を得たLave and Wenger (1991) の正統的周辺参加を参考に、状況との相互作用による学びを観察していく。考察においては、状況を構成する学びの文脈に焦点を当てたLave (1988) の提唱する「舞台」と「場面」を分析枠組みとして、学びの空間における文脈の構成を検討していく。

## 2. 研究背景

本章では、まず初めに、研究対象であるアフリカ都市のインフォーマル・セクターの概観を説明する。制度化を志向するのではなく、実態を理解する視点に至る経緯を説明した後、本研究の目的を提示していく。

### 2.1. アフリカ都市の零細産業

アフリカにおける零細企業への国際的な眼差しは、1970年初頭に始まる。1972年にILOがケニアでの都市調査で目の当たりにした、失業者の増加ではなく、不安定な就業形態として労働する人々が増えた現象を発端として、零細企業は注目された (ILO 1972)。このような不安定な零細企業は、近代的な企業であるフォーマル・セクターの対比として、「インフォーマル・セクター」と呼ばれるようになった (Hart 1973)。零細企業は資本金も少なく、不安定で、スキルが不足している労働者が多いと指摘され、公的な訓練やフォーマル企業への統合の必要性が指摘されてきた (ILO 2009)。

一方で、零細企業は、不安定な存在としてではなく、経済の不確実性に対する重要な緩衝材としての役割を果たしているとも報告される (Singh et al. 2012)。企業への就職からこぼれ落ちた脆弱な労働者ではなく、起業家精神を持ち、雇用を柔軟に生み出す可能性のある人々としてとらえる視点からも研究されている (小川2011; Webb et al. 2013)。Chen (2012) は、インフォーマル・セクターは、単なるフォーマル・セクターの落ちこぼれではなく、人々が自ら選びとって参入していることから、フォーマルとインフォーマルというような二項対立ではなく、「一つの労働のあり方」としてインフォーマル・セクターを見る必要性を指摘する。

本研究が対象とするウガンダ共和国は、零細企業の経済活動が経済全体の43%を占めている (UBOS 2012)。首都カンパラにおいても、零細企業に従事する労働者の割合は半数を越え、多くの労働者は、20代の若年層である (Hobson and Kathage 2017)。ウガンダ都市では、零細企業が増え続けることから、フォーマルとインフォーマルの混在は今後も続く予想される (Lloyd-Jones et al. 2017)。

ウガンダ政府の政策レベルにおいて、インフォーマル・セクターはフォーマル・セクターへの統合対象として扱われている。ウガンダの国家長期目標である「Uganda Vision 2040」では、イ

ンフォーマル・セクターの存続に関する具体的な言及はない (GoU 2013)。教育省のスキルディベロップメントに関する政策である「Skilling Uganda」においても、インフォーマル・セクターは、フォーマル・セクターへ統合する対象とされ、公的TVET機関へいかに参画させるかが記述されている (MoES 2011)。

政策レベルでは、依然としてフォーマル化を推奨するのに対し、Sy (2016) は、政府の政策レベルでのインフォーマル・セクターへの取り組みが、現実と乖離している状況を指摘する。政策から制度的に整備していくことの重要性は認める一方、そのためには、まずインフォーマル・セクターの実態を具体的に理解する必要がある。そこで本研究は、制度化を検討することを目的とせず、現状の理解を目指す立場から、インフォーマル・セクターの労働者の技能形成に焦点をあてていく。

## 2.2. 本研究の目的

本研究は、ウガンダの都市零細金属加工業における学びの空間がいかに構成されているのかを明らかにすることを目的とする。アフリカの零細企業は、不安定性と柔軟性の観点から、組織構造のみならず労働者個人に目を向ける必要性が指摘されてきた。零細産業に従事する人々は、徒弟に入り、仕事をしながら技能や知識を獲得していくため、その実態はとらえづらい。非定型な技能形成の制度化ではなく、仕事と学びが表裏一体の状況における学びの実態の理解を、本研究は志向する。そこで、Lave (1988) が提唱した、学びの文脈を構成する要素である「舞台」と「場面」に着目し、学びの空間における文脈がいかに構成されているのかを本研究で検討する。

## 3. 理論的枠組み

次に、技能形成を行う学びの空間についての議論を、状況的学習論を踏まえて先行研究を整理する。その後本研究の理論的枠組みとなる、学びの空間の「文脈」を構成する、Lave (1988) の提唱する「舞台」と「場面」を踏まえて説明していく。

### 3.1. 学びの空間設計

インフォーマル・セクターにおいて、徒弟制や職場内訓練が広く行われている。その学習は、カリキュラムなどの体系的な教育形式ではなく、模倣と観察などの個人の実践に依拠している。労働実態すらも把握が困難であるインフォーマル・セクターにおいて、技能形成の議論をするのはなおさら難しいとされる (de Beer et al. 2016)。国際機関は、職業訓練校への就学促進や、良質な徒弟制のためのフレームワークといった制度的枠組みを形成してきた (Adams et al. 2013)。

このような、教育の制度設計をしていく教育開発の議論に対し、橋本 (2021) は、教育の制度化が持つ権力性を指摘する。国際教育開発の潮流が、教育から学びへシフトしていても、「いかに学ぶのか」ではなく、「いかに学ばせるか」という教育が前提条件となっているという。この教育制度設計への偏重に対し、東・大澤 (2003) の用語を借用し、教育を所与とする議論は、直

接的に教え込むような「規律訓練型権力」から、直接「教える」という指示的な介入を行わずに、行為の前提条件を設計する「環境管理型権力」へと権力形態が移行したにすぎず、従属する客体として学びが描かれてきたと橋本（2016）は述べる。

加えて、学校教育から労働市場へ、という単線的な経路を前提とする公的教育制度は、柔軟な形態としてのインフォーマル・セクターの労働形態に必ずしも沿うとは限らない。山田（2017）は、フォーマルとインフォーマルの両方を行き来する労働者像が、学校教育から労働市場といった単線的な学習パスではない労働者の経路を明らかにしている。必要に応じて学びなおしたり、仕事場を変えたりする複線的な経路で仕事に従事することを「定職探しの過程」としてではなく、「仕事のあり方」としている。

こうした問題意識のもと、制度的な教育論に批判的な立場として台頭した「状況に埋め込まれた学習」に焦点を当てていく。

### 3.2. 状況との学び

働きながら学ぶような学校外での学びを追求するなかで、状況的学習論という考え方が提唱されてきた。「状況的学習論」では、知識は常に文脈あるいは状況に埋め込まれているものであり、学びはその文脈や状況の中で、相互作用をしながら成立する（Suchman 1987）。

この考えにおいて、知識は、頭の中で処理するような個人の内的プロセスではなく、身体と場所といった状況が織りなす関係の中で獲得されるものである。状況と学びを分離させ、知識を脱文脈化させることは、実際の状況で活用できなければ意味がない上、「教えるべきもの」として形式化され、学ぶ側の主体性が削がれていく。そうではなく、日々置かれている文脈の中で、その文脈に応じた行為として、人々の学びが営まれるのである。

状況との相互作用による学びを、渡部（2010）は、社会の変化が目まぐるしい現代を生きる上で必要な営みであるという。教える側から見た教育は、「形式化された知」を「教え込み型」で効率的で、確実に伝達していくことを模索する。そこでは、教え手の詰め込み型教育となり、学習者が客体とされる。教え込みのような意図された方向性によって学びが駆動するのではなく、個人が状況に応じた学びに向け、状況的学習論は注目される。

状況的学習論に基づけば、学びは教えられることによって生起するのではなく、状況との相互作用によって起きる。この状況的学習論を、仕事と学びが表裏一体である徒弟制における学びに応用したのが、Lave and Wenger（1991）である。

### 3.3. 正統的周辺参加

仕事と学習の同時的な営みは、人類学的視点からLave and Wenger（1991）によって体系的に理論化されている。Lave and Wenger（1991）は、徒弟制的作業環境における「状況に埋め込まれた学習」の実態を明らかにした。徒弟制のような作業現場においては、新参者である未熟練者は、あらかじめ事前に指導を受けてから仕事に参加するのではなく、周辺の作業から直ちに実践に参加する。仕事を共に行う実践共同体の一員として、作業をこなしながら、知識や技能を習得し、

やがて一人前の職人へと成長していく。Lave and Wenger(1991)は、そのような学習プロセスを「正統的周辺参加」と呼んでいる。

教えるという行為を所与とした教育から距離をおき、学びの実践を周囲への適応による共同体における個人のアイデンティティ形成と重ねた点で、正統的周辺参加は既存の学習論とは一線を画す(福島2010)。Lave and Wenger (1991)は、知識が伝達できるとするような「脱文脈化」に懐疑を呈し、学びにおける文脈の重要性を指摘する。教育が学校のような空間で伝達可能であることは、「知識の交換価値」でしかなく、実際に使える「使用価値」を必ずしも意味しない(Lave and Wenger 1991: 112)。

その一方で、正統的周辺参加の考えは、学ぶ個人ではなく、共同体が中心の議論であると指摘されている。田中(2018)は、共同体を形成しているのが個人の行為とされる一方、「共同体への適応」を志向する点で、共同体に従属した客体として学習者が表象されていると指摘する。また、正統的周辺参加は、共同体における役割的アイデンティティが付与されることから、共同体内の変革や共同体外に学び手が向かう動きについては十分に語られていない(Fuller et al. 2005; 山田2019)。このように、正統的周辺参加は、「共同体への参加」を所与とすることから、学ぶ主体というより、共同体に参加する客体としてのニュアンスがある。

正統的周辺参加をはじめとする状況的学習論では、共同体を所与とするように「状況」が学習に先立って存在している。佐藤(1999)は、人間にとっての状況は、各個人によって意味付けられて構成されていることから、ア prioriに存在するものではなく、各個人の認識による多義性と曖昧さがある点を指摘する。この点についてLave(1988)は、「状況」の多義性をとらえるために、状況を構成する「文脈」を、「舞台」と「場面」という概念を用いて考察している。

### 3.4. 学びの文脈を構成する「舞台」と「場面」

Lave(1988)は、学びの空間を構成する文脈の多義性を捉えるために、文脈を「舞台」と「場面」を切り分けて議論を展開している。「舞台」とは客観的実体としての空間を指し、「場面」は個人が意味付ける空間を指す。

Lave(1988)は、「舞台」と「場面」についてスーパーマーケットを事例に説明している。スーパーマーケットという空間は、食料品を買い物するという「舞台」であり、そこは人々と食料品の出会いを仲介する施設である。買い物する人々は、スーパーマーケットで買い物をする中で、いつも買う商品の場所などを経験して空間を意味付けて「場面」を構成していく。たとえ初めて訪れたスーパーマーケットという「舞台」でも、今までの経験から意味付けられた「場面」から、個人は、何千もある商品を隅から隅まで見ずに、大体どこに商品があるのかを把握していくことができる。

状況的学習論では、学び手の置かれた文脈が重要視されているが、文脈は単一なものではなく、「舞台」としての客観的実体でもあれば、個々人の意味づけによる「場面」でもある。「舞台」は空間として存在しているが、「場面」は各個人による「複雑な即興的対応」が含まれている(Lave 1988)。学びの文脈を単一の共同体としての空間ではなく、「多層的な複合体」とであると認識し、



分析する必要がある (佐藤 1999)。本論では、学びの空間を構成する文脈に焦点を当て、どのような「舞台」があり、各個人はどのような意味づけによって「場面」を構成するのかを考察していく。

## 4. 調査概要

本章では、本研究で実施した調査の概要を記していく。まず、本研究の調査期間と調査方法を記述する。そして、対象とした調査地であるウガンダ共和国首都カンパラのカトウェ地区について説明していく。

### 4.1. 調査方法

本研究のデータは、2019年10月から2020年3月にわたって、首都カンパラのカトウェ地区およびカトウェ地区周辺において実施したフィールド調査から得たものである<sup>2</sup>。現地調査では、零細企業労働者の日常的実践から学びを考察していくことから、エスノグラフィーの手法を用いた。使用言語は、ガンダ語と英語であり、聞き取り調査の際、ガンダ語での応答は現地アシスタントの通訳を介した。調査前に、ウガンダ科学技術庁から調査許可を取得し、マケレレ大学社会科学調査倫理委員会から倫理審査を得た。

本調査では、まず、カトウェ地区金属加工業の製造過程、流通経路、周辺個人操業との関係を把握するために、72の零細金属加工作業場とその周辺個人操業の参与観察および聞き取り調査をした。その後、労働者の相互行為に焦点を当てるために、11の零細金属加工作業場における、11名のオーナー、18名の見習い、15名の熟練工を取り巻く労働者間や顧客との相互行為を継続的に観察した。熟練工がカトウェ地区を越えて作業場を移動する際は、他の地区での相互行為や作業を把握するために同行し、観察を行った。

### 4.2. 調査地

本研究の調査地は、ウガンダ共和国首都カンパラの中心地から南西に3km程離れた位置にあるカトウェ地区である。カトウェは、ブガンダ王城の周辺地域であり、植民地時代からガンダ族の鍛冶場が並ぶ地域であった (Trowell 1941)。その後の現在においても零細金属加工業が軒を連ねている。当地区は、ウガンダの中でも零細金属加工業のクラスターとして集積した地域として知られている (Kintu and Aheisibwe 2019)。

## 5. 調査結果

本章では、調査結果を記していく。初めに、調査地であるカトウェ地区における零細金属加工業の組織構造をはじめ、どのような状況かを記す。そして、その状況下で、労働者として参入する見習いの技能習得過程を見ていく。その後、熟練工がいかにして新たな技能や知識を獲得して

いくのかという熟練工の実践を記述していく。最後に、得た知識や技能をどのように自らの製品に反映しているのかについての事例を提示する。

### 5.1. 零細金属加工作業場の状況

カトウエの零細金属加工業の労働者は、大きく3つに分類される。1つ目がオーナーであり、作業場の機材機材を所有している者である。オーナーになるためには、初期費用と安定した収入源となる顧客数が必要となる。2つ目が熟練工であり、製造工程を率先して行う労働者である。オーナーによって口頭で一時的に雇われ、製造作業に携わり、分け前をもらう。一つの作業場にて正規雇用として従事するのではなく、複数の作業場にいくことで収入源を増やしていく。3つ目が見習いである。見習いはオーナーから許可をもらい作業場に参入し、そのオーナーの作業場にて単純作業や雑務を行う。

零細企業に対して、カンパラの地方政府は商業をする企業に対して税金の支払いを求めて定期的にカトウエ地区の零細作業場まで取り立てに来ていた。その金額は労働者数によって規定されていることから、零細産業では、全ての労働者を正規雇用として雇わず、一時雇用として雇うことで支払額を抑えていた。顧客から注文を受注した段階で、口頭で近隣の金属加工熟練工を集めて一時的にチームを編成し、製品を製造する。そのため、顧客の注文を中心とした流動的なチーム編成から成り立ち、多くの熟練工は一時雇用者として仕事をしていた。

顧客の受注の度にチームが編成され、そこに招集されることで、熟練工は参入していくことから、一つの作業場に限らず、複数の作業場のチームに加わり作業をする。熟練工が顧客を持つと、オーナーに機材の使用料を支払い、自らでチームを編成して製造する。熟練工たちが複数の作業場を渡り歩くのは、固定の零細作業場に身をおくと、顧客がいない時に作業場が畳まれてしまうことで仕事を無くすることを回避することも要因であった。零細金属業は、顧客の有無によって各作業場の存続が左右され、入れ替わり立ち替わりが激しいことから、複数の作業場を行き来することは熟練工にとって収入源複数化によるリスク分散の役割を果たしていた。

また、熟練工は複数の作業場を行き来する中、遭遇する熟練工同士でつながりを形成していた。作業場ごとに、製造する製品が異なることから、繁忙期が作業場ごとに異なっていた。熟練工たちは、複数の作業場の繁忙期に参入し、収入を多岐化していた。熟練工たちが移動をして行き交い、製造作業を共に行う中で、熟練工同士でつながりが形成され、それぞれ紹介し合うことで参入する作業場を増やしていた。

### 5.2. 見習いの参入と非教示的な学びの空間

見習いは、親族や知り合いのつながりから作業場に参入し、職業訓練校で技能を学んだ経験のない者は、周辺的な雑務作業から始まる。金属加工で製造する材料を寸法して、手ノコギリで裁断していく作業、製品について土汚れ磨き、資材・製品運び、溶接作業の支えというような単純作業をおこなっていく。それらの作業を3ヶ月程した後、溶接や研磨といった作業も任されていく。

初めにオーナーから切り方や磨き方を教わった後、オーナーも他の業務があるため、直接見習



いに対して教示する時間が割かれることはない。熟練工が教えるときは初めの指示や危険な使用の修正だけである。見習いは、作業を続けていく中で、まずは単純作業ができるようになっていく。作業だけでは分からないようなことは、随時近くの熟練工に聞いていくことで、作業に関する事柄を知っていく。

溶接機や研磨で用いる機材は、熟練工が触っていない時に練習する。溶接の支えをしながら溶接の機材の扱いを見て、熟練工が休憩中に材料の端切れで溶接作業を練習していく。また、材料や製品の運ぶ作業によって、製造プロセスの全体像がわかるようになり、どの部品がどの製品に使用されるのかを把握していく。

このような見習いの単純作業による下積みを経て、ある程度技能を習得した者は、他の作業場にも熟練工と同行してチームに入り、複数の作業場で仕事を心得ていくようになる。そして先述の熟練工のように、複数の作業場を行き来するようになる。熟練工たちは、複数の作業場で製造していても、自らが基礎的な技能を学んだ作業場のことは「ホーム」と呼び、個人で顧客から受注を受けた時は、ホームに戻り、そこでチーム編成し、製造していた。

### 5.3. 作業場を移動する熟練工

熟練工は複数の作業場を渡り歩く中で、大作業場が人手不足の時にはサポートとして呼ばれることもある。カトウェ地区の多くの作業場は、トタン造りの小屋の前で作業をするような零細作業場が大半であるが、中には土地の広い、屋根のある作業場のような世襲で拡大した大作業場が3社、インド系・中国系といった現地の人々の経営ではない大作業場がそれぞれ1社ずつカトウェに存在する。このような大作業場は、研磨や鉄板を切断するための大型の機械といった、小作業場には置いていない機械を所有している。それらの機械を用いて、小作業場では製作しないような製品を生産する。

インド系の作業場は、主に金属加工での材料を取り扱い、顧客は地域の作業場の人々である。一方、中国系の作業場は、デザインを模造した製品を大量生産して、一般的な大企業よりも安価で同じようなデザインを販売するため、カトウェの他の作業場と顧客層が重なる。その為、中国系の作業場とは競争関係になり、顧客の取り合いが懸念されるが、熟練工たちは懸念するよりも、その作業場でサポートとして呼ばれることによるメリットを語る。中国系作業場にサポートへいった経験のある熟練工は、中国系作業場について「カトウェ地区にあの企業（中国系の作業場）があるおかげで、新しい機械の使い方を学べるし、どんな製品がトレンドとして存在するののかの情報へ簡単にアクセスできる」と述べ、「中国系の作業場の模倣速度は早く、3日あれば大企業で製作している製品を模倣できてしまうのだから、感心する。それを見ることでトレンドを追いやすい」と中国企業を媒介にして、新たな製品の情報を仕入れている。大作業場に呼ばれる熟練工は、小作業場にはない機械の使用や新たな製品の製作過程に携わることで、新たな知識・技能を習得している。

また、カトウェの熟練工はカトウェ地区のみならず、他の地域にもサポートで呼ばれることもある。熟練工はよく「サイトに行く」と言い、バイクタクシーに乗って、他の地域へ移動する。

サイトに行くとは、顧客の場所へ熟練工が単体で派遣され、そこで修理や製造を行うことを指す。サイトへのつながりは、主に顧客の紹介や、熟練工同士の紹介の中で得ている。

サイトで作業することの利点は、給料の取り分が多い点、新たな顧客を派生的に見つける機会が増える点を熟練工たちは口にする。サイトに行く熟練工は、

サイトは、MuyengaやNakasero（隣接する近代型都市）での仕事依頼が多く、高級なレストランやホテル、フォーマル企業の一時的なサポートが多いから、かなりの金額をもらえる。そして、今まで出会ったことのない製品や、人とつながることができるから、サイトにいくチャンスがあったら、どんな案件でもとりあえず参入することに意味がある。

と述べ、カトウェ地区内にとどまらず、都市の境界なく行き来している。

このように大作業場やサイトでの仕事を得意にいくことで、自らの経験を積んでいく。一つの作業場で経験を積むのではなく、他の場所に呼ばれたら「とりあえずの参加」として、仕事の空間を投機的に渡り歩いている。次節では、複数の作業場を歩き来した熟練工の製作事例を紹介し、複数の空間で学んだ後の展開を提示する。

#### 5.4. 様々な作業場を歩き渡った熟練工の例

様々な作業場を歩き来した熟練工は、それらの作業場から部分的に学びとって、自らの製品に組み込んでいく。カトウェで20年以上金属加工業に従事する熟練工は、カトウェ地区のみならず、フォーマル企業やサイトに行く経験を積んでいた。各作業場において学び取ったデザインや技法を製作したのが図1の門である。

この製作の背景について、

大型の門がフォーマル企業において売れており、大きさから価値もつけられている。実際Muyengaにはたくさんの大きな家やホテルが立ち並んでいた。それでもカトウェには大型の門は少なく、窓枠や個人の家用のドアばかりだから、売り込むチャンスと思っている。

図1 熟練工の製作した門



(出所) 筆者撮影

と言い、移動していく中で得たフォーマル・セクターの製造情報や、近隣の金属加工の生産品へのニーズの観察から推測していた。

また、製作したデザインについては、

全く同じデザインを作ると、コピーだと咎められ、悪い噂を立てられる。だから、フォーマル・セクターで見たデザインを縦と横で分けることで部分的に取り入れている。このように自分のアイデアが製作に入っていることから相手の製品と違う。

と、完全な複製をさせて部分的な模倣をする意図を語る。

アイデアが思いつくと、すぐに今まで連絡先を交換した顧客に連絡して、買い手を見つけ、すぐに新たな製品を売り出していく。門を製作して売り出した熟練工は、

新しいものを知ったら、それはすぐに自分で組み合わせて製作しないと何も意味がない。自分で組み合わせて製作した製品として売り出して、それが熟練工としての信用につながる。

と言う。

製作して売り出した門は、出荷前に写真をとり、自らの製作した製品として残しておくことで、新たな顧客獲得の引きつけ材料となる。新たなアイデアが吹き込まれた製作品は、チーム編成で加わった他の熟練工や、近隣の作業場に「売れる製品」と認識され、模倣される新たな対象となり、熟練工たちがデザインや製造過程を学び取っていく。このようにして、新たな学ぶ対象である製作品を媒介に、周辺の熟練工たちが、新たに投機する学びの空間を構成していく。

## 6. 考察

前章の調査結果から、本章では考察を記述する。3章で提示した本研究の目的に沿って議論を展開し、零細金属加工業での学びの空間を考察していく。

### 6.1. 労働者をとりまく学びの空間はどのようなものか

零細金属加工業における学びで、見習いから熟練工まで一貫しているのは、非教示的で観察と模倣による学びの空間である。非教示的空間での、見習いの単純作業から技能形成する姿は、周辺参加から、「熟練工としてのアイデンティティ」を志向している点で、正統的周辺参加の一事例であると言える(Lave and Wenger 1991)。その結果、初めに参入した作業場を労働者たちは「ホーム」と呼び、帰属意識を持っている。

一方、熟練工の複数の作業場を転々と移動していた。熟練工は、一つの作業場において個人が帰属することを志向した学びではなく、複数の空間を移動する「とりあえずの参加」の中で出会う新しい知識・技能を学び取っていた。共同体へと個人が没入するのではなく、熟練工の日常的

な一連の行為は、複数の場を渡り歩いている。

調査結果で見られた、見習いと熟練工の異なる学びの空間をLave (1988) の指摘した、文脈の2分類である「舞台」と「場面」と照らし合わせて考察する。まず、見習いの学びの空間は、参加した作業場という実践共同体としての「舞台」における周辺作業から形成される。参入した見習いは、周辺作業から参加する「舞台」において、自らの経験としての「場面」形成し、「熟練アイデンティティ」が付与されていることから、正統的周辺参加の実例であるといえる。

一方、熟練工の学びの空間は、見習いとは異なる。熟練工は複数の作業場を行き来していきながら、新たなデザインや製品についての知識・技能を獲得していた。ある一つの「舞台」から「場面」が生み出されているのではなく、個人のもつ「場面」が、新たな「舞台」となりうる経路に投機して文脈を作り上げている。このような複数の場を通じた一連の個人の行為への視点は、空間としての「舞台」は安定していないが、個人の経験に基づく「場面」をもとに、投機的に「とりあえず参加」して、行為遂行的に新たな「舞台」を形成していた。

熟練工の新しい作業場への参加は、その空間に対するアイデンティティの形成という文脈化ではなく、各所への断片的な参加が、各個人の文脈の一部を構成しているのである。熟練工は複数の作業場へ「とりあえずの参加」を繰り返し、移動する中で新たな技能や製品との遭遇から自らのものにしていく。このことは、正統的周辺参加の、共同体へのアイデンティティの帰属としての学びとは異なる。

熟練工は共同体への帰属ではなく、「とりあえずの参加」を繰り返すことで、各個人の「場面」としての文脈を積み重ねていた。「とりあえずの参加」は、「舞台」が確立していなくても、自らの経験からなる「場面」への投機性によって行為遂行的に文脈を構成している。次節では、正統的周辺参加とは重ならない、「場面」への投機としての「とりあえずの参加」について考察を展開する。

## 6.2. 個人はどのような認識で状況との学びを実践しているのか

熟練工の投機性による行為遂行的に構成される文脈は、個人の「場面」の積み重ねによる経験から生み出されていることを前節で考察した。そこで、「場面」による行為遂行的な新たな学びの空間構成を本節で考察していく。

行為遂行的に空間の関係を書き換えていく実践について、ド・セルトー (1987) は、「戦略」と「戦術」と分類して論じている。「戦略」とは、ある空間の秩序の中で、秩序に沿う形で自らの固有の文脈を作るための「計算的実践」である。一方「戦術」とは、現前する空間を「読み替えていく実践」であり、行為遂行的に現前する状況をなんとかやっていく技法である。共同体という「舞台」の中で、自らの文脈を意味付けていく行為は、「戦略」的な実践であり、個人の「場面」における「複雑な即興的対応」から、学びの空間を作る実践は「戦術」的な実践であるといえる。

戦術的な実践は、現前する空間を単に受け取る行為を意味しない。ド・セルトー (1987) は読むという行為がもつ積極的解釈の側面に注目し、書き手の意図があるテキストでも、読み手の解釈によって、テキストを書いた本来の意図とは別の多義性をもつことから、空間における文脈の成

立は、与え手の意図ではなく、受け手の解釈に依存しているという。一つの現前する状況に対する実践でも、行為者の認識レベルでは、複数の「場面」を構成し、学びの文脈は、即興的な対応から、各個人の中で多層性を持つ。

熟練工が製作した門の事例で見た通り、オリジナルとコピーが氾濫しているように見えるカトウェにおいて、熟練工は、「売れそうな」、「自分の知っている作業場には存在しない」、「役に立ちそうな」という自らの経験に照らし合わせて、部分的に模倣して新たな製品を製作していた。同じ空間で互いに実践することは、共同体という「舞台」へ個人を意味付けていく同一化だけではなく、各個人は、その空間を各々の「場面」において多元的に読み替えて解釈していた。このように、学びの空間は、「舞台」という客観的な存在によって規定されるのではなく、学び手の空間への意味づけである「場面」から構成されている。

また、個人の意味づけである「場面」から、新たな客観的空間としての「舞台」を構成していた。部分的な読み替えによって模倣を駆使し、新たな製品を製作していた。そして、その製品は、他の労働者に対して新たな模倣対象となっていた。「場面」における個人の解釈から生み出された製品という「もの」を媒介し、新たな模倣対象という新しい「舞台」を行為遂行的に作り上げている。零細金属加工業における学びの空間構成は、共同体のような所与とされる「舞台」の中で、自らの「場面」を構成してだけでなく、自らの経験した「場面」を組み合わせることで、行為遂行的に新たな「舞台」を生み出すことで成り立っていた。

## 7. おわりに

本研究は、学びを教育から切り離し、仕事と学びが表裏一体である職場内訓練と徒弟制における学びの空間構成の解明を目的とした。その手がかりとして、状況的学習論に注目し、学びの文脈を細分化したLave (1988) の「場面」と「舞台」を取り上げ、ウガンダ都市の零細金属加工業労働者の学ぶ空間を検討した。

作業場という「舞台」における、個人の経験としての「場面」を積み重ねることによって知識・技能を身につけて熟練のアイデンティティを形成しているのが、正統的周辺参加での学びの空間構成であった。本研究の熟練工の事例では、「舞台」を所与とすることなく、個人が積み重ねた「場面」から、新たな「舞台」へ投機的に移動していき、学びの空間を構成していた。そこでは、「舞台」に参入してだけでなく、「場面」の組み合わせによって新たな製品を生み出し、それを媒介にして新たな「舞台」を行為遂行的に生み出していた。「舞台」が「場面」に先立つだけでなく、「場面」から「舞台」を形成して新たな学びの空間の構成がなされていることが明らかになった。

最後に本研究で提示した視座の課題について述べたい。本研究では、見習いと熟練工の「場面」と「文脈」に焦点を当て、熟練工の移動を分析する一方、見習いと熟練工間の比較を十分にきかれていない。この比較については別稿で詳細に論じていきたい。また、学び空間設計が制度化された学校教育から距離をおき、議論を展開したが、本研究での労働者による学びの空間構成が、いかにして学校空間に転用できるかについては論じていない。そもそも、Lave and Wenger(1991)



の提唱する「正統的周辺参加」は、学校のように脱文脈化された教育空間への懐疑に端を発した学習理論であることから、学校への適応という発想自体、その理念に背いているとの指摘もある(福島2010)。その為、フォーマル教育への適応可能性を考察するには、慎重な検討が必要となる。

状況の不確実性は、アフリカ都市零細企業のみならず、どこにでも潜むものである。渡部(2010)が指摘するように、状況から切り離された脱文脈的な学びは、現実の状況が変化すると、すぐに時代遅れとなる。変化する状況との相互作用から日々学んでいく状況的学習は、状況へ柔軟に対応する上で重要である(渡部2010)。ままたまらない状況の変化に対応していくためには、本研究が提示した、自らの経験した「場面」の積み重ねを、不確かな新しい「舞台」へと投機して参入する姿勢は、「状況のままならなさ」とうまく向き合いながら学びの空間を構成する戦術を示唆している。

## 注

- 1 インフォーマル・セクターの定義や概念規定は多様であり、統一的な定義があるわけではない。本研究では、ウガンダ国民家計調査において定められた定義である、①正規雇用者が5名以下の小規模操業、②税徴収が正確ではない経理、をインフォーマル・セクターと称する(UBOS 2014)。
- 2 本研究の調査は、2019年度国連大学サステイナビリティ高等研究所、Global Leadership Training Programの助成を受けたものである。

## 参考文献

- Adams, A. V., Razmara, S. and Johansson De Silva, S. 2013. *Improving skills development in the informal sector: Strategies for Sub-Saharan Africa (English)*. Washington, D.C.: World Bank.
- 東浩紀・大澤真幸. 2003. 『自由を考える—9・11以降の現代思想』NHK出版.
- Chen, M. A. 2012. The Informal Economy: Definitions, Theories, and Policies. *WEIGO Working Paper*. No 1. Harvard: WIEGO.
- de Beer, J., Fu, K. and Wunsch-Vincent, S. 2016. Innovation in the Informal Economy. In S. Wunsch-Vincent and E. Kraemer-Mbula (Eds.) *the Informal Economy in Developing Nations: Hidden Engine of Innovation? New Economic Insights and Policies*. Cambridge: Cambridge University Press: 53–99.
- ド・セルトー, ミシェル. 1987. 『日常実践のポイエティック』山田登世子(訳). 国文社.
- 福島真人. 2010. 『学習の生態学—リスク・実験・高信頼性』東京大学出版会.
- Fuller, A., Hodkinson, H., Hodkinson, P., and Unwin, L. 2005. Learning as peripheral participation in communities of practice: A reassessment of key concepts in workplace learning. *British Educational Research Journal*. 31 (1): 49–68.
- GoU. 2013. *Uganda Vision 2040*. Kampala: Government of Uganda.
- Hart, K. 1973. Informal Income Opportunities and Urban Employment in Ghana. *The Journal of Modern African Studies*. 11 (1): 61–89.
- 橋本憲幸. 2016. 「教育はグローバル・ガバナンスを統御できるか—国際教育開発の理論的外部—」『国際開発研究』25 (1) : 89–97.
- 橋本憲幸. 2021. 「教育学は国際教育開発に出会えるか」萩原崇世・橋本憲幸・川口純編. 『国際教育開発への挑戦—これからの教育・社会・理論』東信堂 : 201–219.
- Hobson, E. S. W., and Kathage, A. M. 2017. *Uganda-From regulators to enablers: role of city governments in the economic development of greater Kampala (English)*. Washington, D.C.: World Bank.



- ILO. 1972. *Employment Income and Equality: Strategy for Increasing Productive Employment in Kenya*. Geneva: ILO.
- ILO. 2009. *The informal economy in Africa: Promoting transition to formality: Challenges and strategies*. Geneva: ILO.
- Kintu D. and Aheisibwe I. 2019. Exploring the Effectiveness of Informal Apprenticeship in a Community of Practice: A Case Study of Katwe, Kampala-Uganda. *African Journal of Teacher Education*. 8: 238–253.
- Lave, J. 1988. *Cognition in Practice: Mind, mathematics, and culture in everyday life*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lave, J. and Wenger, E. 1991. *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lloyd-Jones, T., Dasgupta, N., Miles, N., Koojo, C. A., Majale, M., Porter, G., and Redin, F. 2017. *Transformational change in Sub-Saharan cities: The role of informality in the hybrid economy of Uganda*. Brussels: Belgium Cities Alliance.
- MoES 2011. *Skilling Uganda, BTVET Strategic Plan 2011-2020*. Kampala: Ministry of Education and Sports.
- 小川さやか. 2011. 『都市を生き抜くための狡知—タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』世界思想社.
- 佐藤学. 1999. 『学びの快楽：ダイアローグへ』世織書房.
- Singh, A., Jain-Chandra, S., and Mohammed, A. 2012. Out of the Shadows. *Finance & Development*. 49 (2): 42–45.
- Sy, A. 2016. *Foresight Africa: Top Priorities for the Continent in 2016*. Washington D. C.: Brookings Institute.
- 田中雅一. 2018. 『誘惑する文化人類学 コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社.
- Trowell, M. 1941. Some royal craftsmen of Buganda. *Uganda Journal*. 8 (2): 49–61.
- UBOS 2012. *2012 Statistical Abstract*. Uganda Bureau of Statistics. Kampala: UBOS.
- UBOS 2014. *Uganda National Household Survey 2012/2013*. Kampala: UBOS.
- 渡部信一. 2010. 「高度情報化時代における「教育」再考—認知科学における「学び」論からのアプローチ—」『教育学研究』77 (4) : 14–26.
- Webb, J. W., Bruton, G. D., Tihanyi, L. and Ireland, R. D. 2013. Research on entrepreneurship in the informal economy: Framing a research agenda. *Journal of Business Venturing*. 28 (5): 598–614.
- 山田肖子. 2017. 「学習者が学び取る職業教育パス：ガーナ国クマン市の職業教育訓練機関における自動車修理関連分野の生徒に対する質問票調査から」『アフリカ研究』91 : 1–16.
- 山田肖子. 2019. 『知識論 情報クラウド時代の“知る”という営み』東信堂.